

第5章 センスメーカーの実質

意味とは、進行中の経験を何かしら伝えるために会話文へと結び付けられた言葉によって生み出されるものである。言葉は、生み出される発話を制約し、その発話を知るために押し付けられるカテゴリーを制約し、このプロセスの結論を保持するラベルを制約するので、誰かに意味を伝える全てのステップに関わっていると言える。

言葉は、他者のみならず自己にとっても重要である。意味の個人性に関してなされた James Boyd White (1990) による議論によると、自己は、一人一人にとって異なる過去の言語経験か生活経験から形成される。われわれが自己と呼ぶものは一部、有機体の非言語的経験と言語との間、自己と自然、そして自己と他者との間の (原則的に不安定な) 認知的交渉の歴史なのである。ロー・スクールや教授会での会話や生に見られるような永続し、自然であるという感覚をよく持ててしまいがちな共有された意味世界でさえ、認知的で不完全な交渉によってのみ維持されており、常に崩壊しうる可能性を孕んでいる。意味世界の最も頑健な部分でさえ、その意味の多くはメンバーが異なれば根本的に表現できないところで異なっている。ある意味で言えば、コミュニティを維持するということは、メンバーが異なれば同じ言語でも異なる意味を持つという事実を決して触れないとの合意を維持することだと言え、こうした意味の違いは大きくなりうるので日々の会話の中で合意が続けて行われている。

言葉は自己のものであるが、それよりも、より大きな集団のものでもある。社会は精神に先行するという Mead の観察によれば、人は様々なボキャブラリーからセンスメーカーをする。しかし、そのボキャブラリーの中の言葉は全て不完全である。なぜなら、言葉は連続的な主題に不連続なラベルを押し付けたもので、言葉とそれが指し示す連続的な主題との間には常にズレがあるからである。Freese (1980) は、経験について言明するために、観察していることを構造化し、文章を構築するということは、連続的な主題に不連続な定義を押し付けることであると述べている。センスメーカーも、連続性を不連続なカテゴリーに、観察を解釈に、経験を制限された事象に、そして認知をあらかじめあった企図やフレームワークに編集する。したがって、センスメーカーの不連続な産物と、対象となる事象それ自体の連続性との間には常に溝が存在する。センスメーカーが成功するかどうかは、第一にその内容が流れや連続性を適度に保っているかどうか、つまり、内容にダイナミクスやプロセス、イメージ、動詞、可能性、物語があるかどうか、第二に、カテゴリーが実世界の中に (主題を非連続的にする境界や差異や裂け目として) 文字通り適度にイナクトされるかどうかによって決まる。センスメーカーにおいてプロセスにとらわれがちだが、そのプロセスで取り扱われている内容、実質を考察しなければ、センスメーカーが持つ重要な実践的意味合いを見落としてしまう。Thucydides の『ペロポネソス戦史』からの引用を用いた White (1990) の説明にも見られるように、集団の変革には、集団で話されていること及びその言葉の意味の変革が求められる。言語の変化は、われわれに文明的な生活を連想させる発話や行動を徐々に不可能にしていくような文化内の変化を反映したものであるので、行動の変化につながりうるからである。実質に注意を向けること、センスメーカー研究の中でそうした実質の位置を定めること、組織のセンスメーカーを規定する6つのボキャブラリーを提示すること、そして最初にミニマリストの立場からセンスメーカーの基本的単位について説明することが本章の目的である。

最小有意味構造

センスメイキングの実質に関する考察は、役割を構築したり対象を解釈したりするにあたって人は何に“依拠する”ものかについての何らかの考えを反映している。人は、フレームを持てばこそ、自らの生や世界の中で生じた物事をその中に置き、知覚し、確認し、ラベル付けすることができるのである。ここで、フレームと手がかりはボキャブラリーとして考えられる。ボキャブラリーの中で、抽象度の高い言葉(フレーム)が抽象度の低い言葉(手がかり)を包括し指示し、その手がかりはより包括的な言葉によって作り出されるコンテキストの中で有意味となるのである。センスメイキングの実質は最小限、フレーム・手がかり・連結の3つの要素からなっている。この考え方は、Upton の、あるものを有意味にするには、モノ・関係・そして別のモノが必要で、そのうち2つを瞬間的に意識することによって残りの一つが決定されるという洞察を含んでいる。思考とは、連続的な感覚や情動の流れは関係の論理的作用によって意識の瞬間へと区切られたものである。それは再認の瞬間とも呼べる。なぜなら、関係を付加することで経験のある瞬間を有意味なものにするプロセスは常に、再生のために神経構造に記録されている過去の瞬間に似ているものを見ることだからである。

センスや意味には2つの要素と1つの関係が必要だが、それら3つのうちどれから着目するかとは関係なく意味は生み出される。内容は、“意識の瞬間”を経験の瞬間が過去の瞬間と結び付けられる“再認の瞬間”として論じる時初めて生まれる。「過去の瞬間+連結+現在経験している瞬間」という組み合わせこそが、現在の状況の有意味な定義を生み出している。

【要約 by 伊藤梢】